

盛岡市周辺の地理学的考察

伊 藤 敦 子

論文の内容構成は次の通りである。

第1章 地域の概説

調査地域は北上盆地北端の岩手県中央部に位置する人口約18万人の地方中都市である。市の中央部とその以西はおおむね平坦をなし、この中を北上川は雫石川、中津川等を分流しながら南に向かって流れている。

気候は冬は寒く無霜期間は短い夏は比較的高温になり易いという、内陸盆地性気候である。

当市の農業をみると産業上に占る位置は年々下る傾向にある。農業土地利用は、東部地域一帯が山間部になっているため林野率は79%と高いのに、耕地比率は9.3%と低い。農業生産及び生産額からみて米、リンゴ、蔬菜及び畜産が重要な位置を占る。

第2章 地 形

北上盆地の成因は第三紀中新世の奥羽山脈の生成に関連した地殻運動によるもので、その結果奥羽山脈側には断層地形が明瞭である。当地域の東西両側はこの北上、奥羽両山脈に属する山地が連なり、また特に東部には北山、山王山等の丘陵も存在する。岩手火山南東麓の末端に当る北部は、火山性の台地となっている。この台地の南は北上川及び雫石川によって作られた低平な沖積平野で、構成物質、比高等から上位面と下位面にわけられる。さらに北上川流域には上記の台地面を切って小規模ながら二段の段丘が形成されている。その他谷床沖積地、崩積地と全部で七つの区分にわけられた。

第3章 農 業

今日みられる農業土地利用の原型は、主要生産物の種類にしる農業法にせよ、明治初めの新農業政策によるものである。その一つ商品作物のリンゴは主として丘陵に栽培されている。専業農家は少なく水田耕作を兼ねているのが多く、近年伸び悩みのかんがある。稲作は度々の冷害にもかかわらず品種改良、農業技術の向上等により農業生産の中核をなしており、水田は北上川西部沖積地帯

に集中している。蔬菜は概して作付種類が多い割には個々の種類別作付面積は小さく、また地元外生産物の影響を受けながらもその需要は伸びている。こうした農業による市域農村部は自然条件及び社会経済条件の相違により農業型態も地区によって特異性を示し、六つの農業地域区分が可能である。

第4章 農業の動向と課題

所で以上のような当市の農業も近年都市化の影響を受け、それは直接農家人口と農業労働力の減少、経営階層の下向化、兼業の進行、農地転用等にあらわれている。特に市街地周辺の農業地域においてはその傾向が著しい。従って今後の市農業のあり方として地域別の対策、都市近郊型農業の推進等が根本的にはからなければならない。

第5章 要 約

当地域は古来から交通・文化の通路であり、しかもまた北上川縦谷平野の沃野を擁する北上盆地を背景として防衛的にも領地（岩手県）のほぼ中央をしめるという地理的位置はそれだけでも発展的地域構成をもっており、南部20万石の城下町そして県庁所在地として中核をなす要因もここにあった。しかしながら工業その他の諸産業の欠如は、従来の消費的性格と相まってその後の都市の発展を飛躍的なものとはしなかった。また市制施行以降何度かわたる合併は農村の性格を与えたが、近年の都市化により農業構造も変りつつあり、さらに都市そのものも生産管理中枢都市、地方開発都市へと移行する方向に向っている。

西天龍地域の地理学的考察

江 橋 晴 子

調査地域は、伊那谷の最北部、辰野町から伊那市に至る長さ15Km、幅500m～7Kmの天龍川上流右岸の地域である。昭和23年土地利用図によれば、集落、耕地等の南北方向の帯状配列が顕著であるので、本論文では農業地域区分を行ない、同時に土地利用景観上の帯状配列を規定する要因が何であるかを究明することにより、地域性をとらえることを試みた。

論文の構成は次の如くである。

第一章 伊那盆地の概観 第二章 西天龍地域の地形 第三章 気 候

第四章 農業集落及び農地開発の歴史 第五章 現在の農業地域